



# 至福のワインづくり

農村部における過疎、高齢化進行の一方で、高齢年齢層の都市部から農村部への還流が新たな動きとして着目されています。開放的な北海道の農山漁村はその豊かな自然環境と比較的整った生活基盤とあいまって、移住希望の多い地域となっています。本シリーズでは、北海道を事例として、移住・長期滞在・二地域居住の地域社会に与える影響と今後の方向性を探ります。

都市生活者が望む田舎暮らしの目的の一つに農業がある。しかし、一口に農業としても、北海道らしく何十町歩もの畑を大型トラクターで耕す本格的なものから家庭菜園程度のもので千差万別である。こうした農業の中でも、すでに田舎生活を楽しんでいる田舎暮らしの人口の一部が最近ではまっているのが、自らの畑でブドウを育て、自家製ワインを製造するといったものである。今回は、札幌近郊でこうした取り組みを行っている二人の都会人たち取材した。

田村さんのワインづくりは、深い問題意識から生まれた。当初、田村さんも、わが国産業の国際競争力強化のために都会を整備し、雇用を創出していくという視点で国内を見ていた。その後のスタンフォードでの滞在経験から日本の産業形態を見ると、縦型の業種組織はあるが、個々に独立した企業形態が少ないし育ちにくいことに気づいた。大学で「ベンチャー」や「インキュベーション」について説いてみても、行動を起す人があまりにも少ないのだ。また、都市以外の地域を見渡すと、最も悲惨な状態になっていた。特に北海道の農村・農業を何とかしなきゃと危機意識を持った。

農村部における過疎、高齢化進行の一方で、高齢年齢層の都市部から農村部への還流が新たな動きとして着目されています。開放的な北海道の農山漁村はその豊かな自然環境と比較的整った生活基盤とあいまって、移住希望の多い地域となっています。本シリーズでは、北海道を事例として、移住・長期滞在・二地域居住の地域社会に与える影響と今後の方向性を探ります。

札幌市中央区盤渓は、札幌の中心部から車で20分ほどの都会の山村である。30年前に市民向けのスキー場ができてから、市民の憩いの場となり、唯一の小学校は札幌市内でありながら、早くから山村留学の受け入れ校になっていた。このよつな都市近郊農村である盤渓と札幌市街地の境界部分、盤渓峠にそのワイン工房はある。工房の主は田村修二さん(66歳)。東京生まれ、東京育ちの田村さんは、大学卒業後通商産業省(現経済産業省)に入省。スタンフォード大学院(現経済産業省)を経て国際社会で活躍。1983年に札幌通産局(現北海道経済産業局)商工部長として赴任。このことが、田村さんのその後

の高級品種、メルローは成長を止めている。しかし、カマイ・ソービニオンはよく育つ。立派な枝振りでも一番元気の良い木だ。この木に最良の実をつけさせるためには、どのようなせん定をすればよいか、試行錯誤を続けている。北海道のテロワール(気候、地形、地質などの複合的地域性)に最も適したワイン用のブドウ種とその栽培方法探しというとても面白い試みに立ち向かっているのだ。ちなみに、前述した田村さんにカマイ・ソービニオンを株分けしてあげたのは向井さんである。

農山漁村の二地域居住をどう思うかを田村さんに聞いた。「都会生活がつかないから都会を捨てて農村に行くということではなく、都会の魅力や生活をマスターして都会の感性を農村に持ち込むことが重要である。それを農村生活に活かすことができる。二都物語ですよ。」

その後(社)海外コンサルティング企業協会で東京を中心に海外を忙しく飛び回る生活に入っても、心の拠点は札幌にあり、札幌のITベンチャーやバイオ企業などを応援。また、'96年から北海道大学客員教授として先端的な産学学究の拠点である産業クラスターや北キャンパスの立ち上げにも尽力する。

「農業は力仕事です。都会に住まいを持っているのは、いつか仕事ができなくなるかわからない。そのときにひとの世話にならないよつな保険ですよ。マンションは便利ですから」と向井さんはいつがそのエネルギーに満ちた精神とブドウづくりへの情熱しつかりとした体格からは栽培を始めてまもない若いブドウたちが最も力強いワインを生み出す樹齢30〜40年木を迎えるまで、その日は訪れないよつに思える。

都市農村の二地域居住をどう思うかを田村さんに聞いた。「都会生活がつかないから都会を捨てて農村に行くということではなく、都会の魅力や生活をマスターして都会の感性を農村に持ち込むことが重要である。それを農村生活に活かすことができる。二都物語ですよ。」

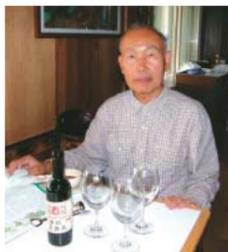
友達を自分の畑で採れたもので迎えたい。向井さんに農業を始めた理由を問うと、次のよつな答えが返ってきた。「友達が多いから。そうしたお客さんたちを自分の畑で採れたもので迎えたい。そこにワインがあれば、友達と過ごす時間ももつと楽しい。」

最後に、向井さんにとつての農業とは何かと聞く。「苦しみですよ。大変ですよ。決して楽しくはないね。でも、あとからが楽しい。そのお返しにこつこつ飲み物があつたりする。それを介して、友達と会話できる豊かな時間が生まれる。それが「褒美なんです」。植物を愛し、人との出会いを大切に、笑顔絶やさずに、夢中になれるテーマを追求している。やさしさを体中から発散し、畑に立つ向井さんの姿は、美しいマオイの丘の風景にとつても自然に融けこんでいた。

都市農村の二地域居住をどう思うかを田村さんに聞いた。「都会生活がつかないから都会を捨てて農村に行くということではなく、都会の魅力や生活をマスターして都会の感性を農村に持ち込むことが重要である。それを農村生活に活かすことができる。二都物語ですよ。」

「農業は力仕事です。都会に住まいを持っているのは、いつか仕事ができなくなるかわからない。そのときにひとの世話にならないよつな保険ですよ。マンションは便利ですから」と向井さんはいつがそのエネルギーに満ちた精神とブドウづくりへの情熱しつかりとした体格からは栽培を始めてまもない若いブドウたちが最も力強いワインを生み出す樹齢30〜40年木を迎えるまで、その日は訪れないよつに思える。

最後に、向井さんにとつての農業とは何かと聞く。「苦しみですよ。大変ですよ。決して楽しくはないね。でも、あとからが楽しい。そのお返しにこつこつ飲み物があつたりする。それを介して、友達と会話できる豊かな時間が生まれる。それが「褒美なんです」。植物を愛し、人との出会いを大切に、笑顔絶やさずに、夢中になれるテーマを追求している。やさしさを体中から発散し、畑に立つ向井さんの姿は、美しいマオイの丘の風景にとつても自然に融けこんでいた。



ワインを楽しんで



斜面のブドウ畑に立つ向井さん



ブドウのときは？ 田村さん



ベランダの外にはブドウ畑

農山漁村の二地域居住をどう思うかを田村さんに聞いた。「都会生活がつかないから都会を捨てて農村に行くということではなく、都会の魅力や生活をマスターして都会の感性を農村に持ち込むことが重要である。それを農村生活に活かすことができる。二都物語ですよ。」

農村でブドウづくり・ワインづくりという未知なる世界に挑み続けている都会人、田村さん。その尽きない好奇心、そして深く終わりのないテーマに挑戦する田村さんの姿勢はとてつもないトでエレガントに見えた。

**菜根荘の日々**

田村さんがワインづくりに余念のない盤渓峠から広大な石狩平野を挟んだ反対側に、千歳市、由仁町、長沼町、栗山町、若見沢市にまたがる海拔250m程度の低い丘が連なっている。これがマオイ丘陵である。その長沼町域の一角丘の中腹西斜面の4千坪の敷地に「菜根荘」が建っている。菜根荘の主である向井隆さん(69

歳)は、北海道電気技術サービスク会会長、北海道経済団体連合会の常務理事も務める現役パリのビジネスマンである。札幌市内のマンションで生活している向井さんが、現在の土地を手に入れたのが89年。以来、現職の社長・会長として忙しい仕事の合間を縫ってマオイの丘に通い詰めた。敷地は碎石場の跡地であったことから、まず土を買って自分でトラックを運転し覆土することから始まった。次に土壌改良を図りながらさまざまな花や農作物の栽培にチャレンジ。段々マオイでの滞在時間が長くなると、休憩したり、時には仮眠したり、食事を摂ったりする施設が必要になる。90年に地上2階地下1階の菜根荘をほとんど自分一人で建てた。春には一面のチューリップ畑が現れ、その後、バラが盛りを迎える。食事時には畑から葱やニンニクを採ってきて食卓に並べる。そして極めつけは、札幌の灯りや日本海を望みながら楽しむ友人との語り合いのときである。

**友達を自分の畑で採れたもので迎えたい**

向井さんに農業を始めた理由を問うと、次のよつな答えが返ってきた。「友達が多いから。そうしたお客さんたちを自分の畑で採れたもので迎えたい。そこにワインがあれば、友達と過ごす時間ももつと楽しい。」

15年前には、一般の人が農地を取得することは非常に難しかった。そこで、向井さんは碎石場の跡地を選ばざるを得なかった。しかし、ブドウは穀物生産には適さないよつな石の多い荒地で厳しく育てるほつが、ワインづくりのためには良い木になる。偶然とはいえ、向井さんは正しい土地の選択をしたことになる。

畑にはキャンベル、メルロー、カベルネフラン、ナイアガラなど16種のブドウが植えてある。土地や気候との相性が悪いのだから、フランス

の高級品種、メルローは成長を止めている。しかし、カマイ・ソービニオンはよく育つ。立派な枝振りでも一番元気の良い木だ。この木に最良の実をつけさせるためには、どのようなせん定をすればよいか、試行錯誤を続けている。北海道のテロワール(気候、地形、地質などの複合的地域性)に最も適したワイン用のブドウ種とその栽培方法探しというとても面白い試みに立ち向かっているのだ。ちなみに、前述した田村さんにカマイ・ソービニオンを株分けしてあげたのは向井さんである。

**つらい農作業の「褒美」**

「農業は力仕事です。都会に住まいを持っているのは、いつか仕事ができなくなるかわからない。そのときにひとの世話にならないよつな保険ですよ。マンションは便利ですから」と向井さんはいつがそのエネルギーに満ちた精神とブドウづくりへの情熱しつかりとした体格からは栽培を始めてまもない若いブドウたちが最も力強いワインを生み出す樹齢30〜40年木を迎えるまで、その日は訪れないよつに思える。

最後に、向井さんにとつての農業とは何かと聞く。「苦しみですよ。大変ですよ。決して楽しくはないね。でも、あとからが楽しい。そのお返しにこつこつ飲み物があつたりする。それを介して、友達と会話できる豊かな時間が生まれる。それが「褒美なんです」。植物を愛し、人との出会いを大切に、笑顔絶やさずに、夢中になれるテーマを追求している。やさしさを体中から発散し、畑に立つ向井さんの姿は、美しいマオイの丘の風景にとつても自然に融けこんでいた。

レポーター  
小俣 寛  
(財)北海道地域総合開発機構主任研究員